『研究ノート』

# 『太上一乗海空智蔵経』巻二の覚書（一）

武田秀夫

『太上一乗海空智蔵経』（以下海空経と略称）が、『涅槃経』等の大乗仏典を基に、道教理論を創成、発展させようとしたことは周知の通りである。巻二の哀歎品は『涅槃経』巻第二十一高貴徳王菩薩品之三、巻第二十二高貴徳菩薩品之四、巻第二十七獅子吼菩薩品之三　を襲っての論である。ここでは海空経巻二の三分の二程の、獅子吼菩薩品の略全篇に対応する部分について、いくつかの気の付いた点を覚書としたい。

先ず『国訳一切経』涅槃部二（大東出版会　昭和五四年版）の付録として付けられた、常盤大定氏の「涅槃経内容表示」に従って、獅子吼菩薩品の内容の大枠を示す。次に更にその細項目の内、海空智蔵経に関係する項目を示し、それに海空智蔵経の対応する記号を付す。

獅子吼菩薩品（仏性を明かす）（大枠）

獅子吼菩薩品

Ⅰ、仏性を明かす

1仏性を明かす

2中道を明かす

3縛解を明かす

4修道を明かす

Ⅱ、経を歎ず

獅子吼菩薩品（細項目）

Ⅰ、仏性を明かす

1仏性を明かす（海空経巻二に対応する部分なし）

2中道を明かす（同右）

3縛解を明かす…A、B、C、D

五番の問答有り。縁起無きなれども然も縛解有ることを論ず。

4修道を明かす

一明道可修…E、F、G

三番問答有り

二正明修道

イ明修道――繹――（あ）問（戒定慧に就いて）…H

ロ論義―①（三番涅槃を論ず、涅槃常住と因果との関係に就いて）…I、J、K

②（四番仏性を論ず、仏性の一多と修道との関係に就いて）…L、M、N、O

Ⅱ、経を歎ず（海空経巻二に対応する部分なし）

上記A～Oによって表示した『海空経』巻二の該当箇所を、鎌田茂雄著『道蔵内佛教思想資料集成』（大蔵出版一九八六年）所載のものによって示す。（芸文印書館本一九七七年版では第二冊目）今回はAの一段だけであるが、他の箇所も示しておきたい。

A、最初「爾時海空」～四二頁下九行目「煩悩如何」まで

B、四二頁下十行目～四三頁上六行目まで

C、四三頁上七行目～四三頁上十三行目まで

D、四三頁上十四行目～四三頁下一行目まで

E、四三頁下二行目～四三頁下六行目まで

F、四三頁下八行目～四三頁下十九行目まで

G、四三頁下二十行目～四四頁上十一行目まで

H、四四頁上十二行目～四四頁下十八行目まで

I、四四頁下十九行目～四五頁上二行目まで

J、四五頁上三行目～四五頁上七行目まで

K、四五頁上八行目～四五頁上十三行目まで

L、四五頁上十四行目～四五頁下四行目まで

M、四五頁下五行目～四五頁下十四行目まで

N、四五頁下十五行目～四六頁上五行目まで

O、四六頁六行目～四六頁上十四行目まで

これでも分かるように、『海空経』巻二は「獅子吼菩薩品」のI、仏性を明かすの内、3、縛解を明かすと4、修道を明かすの部分を基にしていることになる。

［一］獅子吼菩薩品の最初の部分とAのその部分について

『涅槃経』の方は獅子吼の世尊に対する質問からはじまる。

「世尊よ、仏のおっしゃるようですなら、ありとあらゆるすべての存在には二つの［その存在する］原因があることになります。一つは正因、一つは縁因です。この

二つの原因によって、従って［本来すべての存在には］束縛も解脱もないはずです。

この五陰は一瞬一瞬生滅しています。そのように生滅しているものならば「つまり、必然的にそうならば」、一体それをだれが束縛し、一体だれが解脱させましょうか。

世尊よ、この五陰によって後の五陰は生まれますが、この五陰が必然的に滅することによって後の五陰に成るわけではありません。そうではありますが、後の五陰を生じるのです。それは例えば、種子は芽を生じますが、種子は芽に成らないようなものです。［種子は］芽に成らないが、芽を生じさせます。

衆生も同様です。ですから、一体束縛とか解脱とかが、どういうことなのかが問題になります。」

この獅子吼菩薩の疑問は、すべてが必然的な生滅を法則としているならば、例えば記号で、A（種子＝生）→（滅）→B（芽＝生）と表示したとき、AはBの生成の原因ではあるが、であるならば当然のことながらそれはAはBではない、ということを意味することになるのではないか、ということである。つまり、一切が必然的生滅であり、一切が変化する、しかも原因と結果が違うものであるなら、例えば解脱の［原］因があったとしても、解脱の［結］果にはならないことになる、ということであった。解脱の［原］因とされる仏性を問題にするとき、当然出てくる疑問であろう。解脱の因が解脱の果となる必然性はないことになるからであろう。

この疑問に対しての世尊の回答は次のようである。少し長いが見てみる。

「善男子よ、諦聴せよ。汝に分別して解説しよう。

善男子よ、例えば次のような事態のことを思ってください。

死に瀕した人がいます。一族の人々が周りにいて、泣き叫び悲しんでいます。その将に死なんとしている人は死の恐れにとらわれ、何かによって救われるなんてことは分かりようはずもありません。［その人は］五情が有るはずですが、覚知は出来なくなっているのです。肢体はブルブルと震えていますがどうすることも出来ないのです。身体は冷え、その温もりも尽きようとしているのです。そうした時に、生前に行った善悪のことを思ってください。

善男子よ、例えば次のことを思ってください。

太陽が没しようとしています。山影はどんどん東に移っていきます。決して西に移っては行きませんことを。

衆生の業とその果もそれと同じことなのです。

この陰が滅するとき次の陰が瞬時に生じます。例えば灯が生じて闇が滅し、灯が滅すると闇が生じるのです。

善男子よ、蠟と印とのようなものです。印が泥に捺されると、印は泥と合体します。そのとき印は滅して文字が生じますが、蠟印はそのまま泥の中にあります。文字が泥から出てきたわけではありません。他所から来たわけでもありません。［蠟］印の因縁によってこの文字が生じたのです。

現在の陰［＝存在］が滅すると、中陰の［五］陰［＝存在］が生じるのです。ですが、現在陰が決して中陰の五陰に変化したわけではありません。中陰の五陰も自ら生じたわけではありません。他所から来たわけでもありません。が、現在陰によって中陰の陰が生じたのです。それは、蠟印が泥に捺されて、印が滅して文字が生まれたようなものです。言葉に差異はないのですが、時節がそれぞれ異なっています。（筆者注：ここで中陰の陰［中陰の存在］が出てきたのには意味がある。A→(A／B)→Bの中の（A／B）のところが中陰の陰である。これは獅子吼菩薩がA→Bと考えて疑問を提出していたことに対して、世尊は仏教の重要な論理を展開することになる。言葉に差異はないのですが云々は、獅子吼菩薩のA→Bの存在の連鎖の断絶の疑問に答えるものである。）

この故に私は次のように言うのである。

中陰の五陰（霊的存在）は肉眼で見ることの出来ぬ、天眼で見えるものです。この中陰には三種の食があります。思食と触食と意食です。そして中陰の種類は二種です。善業果と悪業果です。善業によって善覚観を得、悪業によって悪覚観を得るのです。例えば、父母交合のとき、業因縁によってまっしぐらに受生（生命の誕生）へと向かいますが、母はそのとき愛、父は瞋、の中にあります。父の精が出たとき、これこそ私のものだと思います。そして歓喜に震えます。この三種（母愛と父瞋と父の私欲）の煩悩の因縁によって中陰の陰は壊れて、後の五陰（子供）が生まれるのです。それは、蠟印が泥に捺されて、蠟印が壊れて文字が生じたようなものです。

生じるときの原因には具と不具とがあります。［五体満足の］具者は［欲をそそる美］色を見るのですが、それは貪欲からです。ですからそれを愛というのです。さて、［五体満足の具者も］狂なるが故に貪を生じます。

それを無明と言います。この貪愛・無明の因縁のために見る世界が総て顚倒するのです。無常に常を見、無我に我を見、無楽に楽を見、無浄に浄を見るといった塩梅です。こうした四つの顚倒が善悪の行です。（筆者注：ここは上記の（A／B）の中陰の問題を論じていて、大事な所であろうが、筆者によく分からぬところなので、このままにしておきたい。）

そして、煩悩が業となり、業が煩悩となる。これが繫縛であります。（筆者注：ここに突然、煩悩と業が出てくるのに困惑する。訳が分からなくなるが）そういうことで、五陰（筆者注：この五陰が中陰のそれなのか、現在のそれなのか、どちらを指しているのかはっきりしないが）と言うのである。

ところで、もし仏あるいは仏の弟子達の善知識に交わることが出来て、十二部経を聞き得ることが出来たなら、善の世界を観ることになります。そして大智慧を得ることになります。大智慧とは正知見のことです。この知見を得るが故に生死の間際に悔心が生じます。この悔心が生まれるから歓楽は生じないのです。そしてそれは貪心を滅ぼします。この貪心を滅ぼすが故に八聖道を修行するのです。この八聖道を修行するので生死なきことになります。そのことが解脱なのです。それは例えば、火が薪に出会わないならば、滅というようなものです。そのように生死を滅することを滅度といいます。このことが五陰滅です。」

以上が世尊の答えであった。

その中心は、先ほどのA→（A／B）→Bの（A／B）の中陰の問題であろう。ところが一方『海空経』のほうは、その問題をとりあげていない。何故それを除いたのかといえば、道教のほうにそうした考えかたがなかったからであろう。従ってそれを取り入れてしまうなら、それはもう道教ではなくなってしまうと考えられたからであろう。とりあえず、『海空経』の最初の一段を見てみたい。

「そのとき、海空智蔵は即座に座から立ち上がると、稽首作礼し、立て膝をし手を組んで、天尊にこう申しあげた。そのようなお説はまことに真実このうえなく、その微妙な功徳は不可思議なほどであります。

さてもいま私が無数のものの造化の由来がどのようなものであるかを思ってみますに、衆生とは何んなのでありましょうか。すべてのものごとにはそれぞれ道性があり、因縁から生じてきます。このようでありますならば、

［道性には］束縛があるべきでしょうか、無かるべきでしょうか。［その束縛は］五陰でしょうか、六塵でしょうか。いま私が思いますのは、念念生滅のことであります。この［念念］生滅はだれが束縛し、だれが束縛しないのでしょうか。だれが解脱せしめ、だれが解脱せしめないのでしょうか。因縁とは、この五陰によってあの五陰を生じ、この［五］陰の滅によってあの［五］陰を生じないことです。［このようでありますならば］どうして五陰が煩悩に染められるのでしょうか。念念生滅と煩悩［との関係］はどのようなのでしょうか。」

ここまでが海空智蔵の質問である。多分に誤読の嫌いがあるが、今の理解の仕方を提示しておく。問題になる箇所の原文は「我今於是思念萬兆造化之由云何衆生一切諸法各有道性従因縁生」であろう。ここを「我今於是思念萬兆造化之由、云何衆生、一切諸法各有道性、従因縁生」と断句した。そして一切諸法の道性と一切諸法の因縁との関係、つまり道性と因縁との関係を問題にしていると理解してみたのである。

海空智蔵は恐らく道性は因縁を越えていると考えていたのではないか。そうなると、両者は関係がなくなってしまう。そこで念念生滅という時間を持ち出して来て、それを無時間的と思われる道性の中に、無理やり押し込めることによって、道性を因縁と関連させ、そのことによって、さらに道性を五陰、煩悩とも関係させて、結局のところ道性を有する衆生を一体なにが束縛し、なにが解脱せしめるのか、という質問を呈したのではないか、と考えてみた。以下それに対する天尊の回答を見てみたい。

「善き哉、善き哉。善男子よ、諦聴せよ。私は汝のために分別して解説しよう。善男子よ、例えば衆生が臨終の苦痛に喘いでいるような場合、父母妻子一族が取り囲んで嘆き悲しんでいる。［その人は］仰向けのまま死の恐怖にとらえられていて、助かる術を知りません。五情は有りますが、学知はありません。肢体は震えてもどうすることもできません。体は冷え、気命が尽きようとしています。そのとき［その人の］行った罪福の応報の業によって次に生まれるところが分かるのです。あるいは三途五道の所、あるいは人間界にです。すべて業に随っていて寸分の狂いもありません。

善男子よ、例えば太陽が傾いて沈もうとしている場合、

山や丘の影は東に移動しますが、西に行くことはありません。衆生の業の果もそのようなのです。この五陰が滅すると、あの五陰が生じます。例えば灯明の如くです。灯が生じますと闇は滅します。

善男子よ、例えば泥と瓶の如くです。泥と瓶が合体しますと、泥は滅して瓶が生じます。そしてこの泥を瓶とはいいません。瓶は泥ではありませんが、ほかから来たのでもありません。泥の因縁によってこの瓶が生じたのです。

善男子よ、この五陰が滅して、あの五陰が生じます。この五陰が最後まで変じないということであの五陰を生じるのです。あの五陰もおのずと生じて来るわけではありません。ほかから来るわけでもありません。この[五]陰によってあの五陰が生じるのです。[それは]泥と瓶の場合も同じです。泥が滅して瓶が生じるのです。[泥と瓶の]体は同じですが、時に随ってそれぞれ異なるのはそうした訳なのです。この五陰によってあの五陰が生じますが、[それは]この五陰が滅することによります。

私は[この陰が滅して生じてくる]あの陰のことをのべましたが、[この陰には]善陰と悪陰があります。[この]善[陰]と悪[陰]を観察してみましょう。父母が交合したとき、業の因縁に随って生命を得ますが、そのとき母には愛が、父には慈が生じ、父母が[生命を]思ったとき、心に歓喜の情が湧きます。しかしこのような[因]縁であるが故に悉くが顚倒因なのです。愛無きところに愛を見、楽無きところに楽を見、無常に常を見ます。このような倒見が善悪の因となるのです。そして[善悪の因である]煩悩が業となり、業が煩悩となるのです。このことを「結縛」というのです。そのようなあり方は「念念生滅」[というものなの]です。

もし善人が高徳の人と知り合い、その方から三洞霊宝十部妙文を聞くことができ、その教えを聞いて、[その方を]尊敬し礼拝し、巡って賛嘆し、[妙文を]読誦し書写し、一心に教えを守り、心を清めて供養し、四六時中思いを凝らし、一切[の救済]を絶えることなく祈念するならば、そしてこの間懺悔をし続けるならば、懺悔の心は歓喜の心が生じるとともに止みます。この歓喜の心が生じるが故に妻子から離れ、独り山林に入って真道を存念することになるのです。こうした因縁によって、灯が闇を滅するように、生死中に「生死から」解脱して、諸煩悩を滅することができるのです。それを「滅度」と

いい、そのようなあり方を「因縁滅」というのです。」

以上が天尊の返答である。

この回答には先に述べたように、世尊が獅子吼菩薩に答えた時の「中陰の陰」の問題が出てこない。従って『海空経』の天尊の方は、A［＝この五陰］→B［あの五陰］へと直接連続する。そしてこれを連続させているのは「念念生滅」の「結縛」であるが、「存真念道」の修行によって打破できる、とする。

要するに、天尊の解答は「念念生滅」である「結縛」つまり「善悪因―煩悩―業」によって五陰は束縛されている、とするものである。従って「念念生滅」と「煩悩」とは「結縛」の二重性、二面性を表すものである、としたい。残念ながら、今回はAの部分しか見ることができなかった。後の部分も出来るだけ早く、と思う。